

ごあいさつ

令和3年2月4日、金子伊昔紅氏の住宅兼医院であった旧壺春堂
醫院主屋・土蔵が国の登録有形文化財に登録されたことをきっかけ
に収蔵資料の整理が開始されました。

町内には近代俳句に関する資料が数多くありますが、同医院で昭
和前半から戦後にかけての資料が一括して見つかったことは、町の
俳句の歴史をたどる上で大きな意義を持ちます。

本展は昨年10月の『皆野の俳句～戦前編～』に続く、第2回目の
開催となります。今回は昭和16年から昭和20年までの太平洋戦争
を中心に、持田紫水、金子兜太、塩谷孝という3人の町ゆかりの俳人
を取り上げます。紫水は現在の中国大陸から東南アジア島しょ部、兜
太はミクロネシア、孝は中国大陸へ出征し、多くの作品とともに当時
の俳壇や世相の様子を伺わせる記録を残しました。本展が、町の俳句
の歴史をたどる一助となれば幸いです。

末筆になりましたが、本企画展開催にあたり、貴重な資料をご出展い
ただいた壺春堂や所蔵者各位、ご協力いただいた「兜太・産土の会」
の皆さま、そして記念講演会を快くお引き受けいただいた田中亜美様
に心から感謝申し上げます。

皆野町教育委員会

1-1 出征以前（～昭和15年）

持田紫水（本名：貞治）は大正6年1月29日、三沢小根で生まれました。三沢村尋常小学校卒業後、昭和12年に青年学校を優秀な成績で卒業し、その間、三沢村青年団役員として活動したといえます（『三沢村誌』）。紫水の作品はありませんが、昭和10年の「三沢村青年団報第7号」が残されています。同報には詩、短歌、俳句欄が設けられ、青年が多くの作品を投稿しています。

昭和7年、本町初めての本格的な俳誌『若鮎』が創刊されます。『馬酔木』の新興俳句運動の流れを汲む地方俳誌であり、同誌で学んだ町の俳人は馬酔木系俳誌である『鶴』、『初鴨』、『暖流』、『巖^{いわお}』等で活躍します。

紫水は同じ三沢出身である清水袈裟^{けさお}二等とともに『若鮎』で学んだ後、昭和14年頃から『馬酔木』の「新葉抄」へ投句していたようです。同欄の選句をしていたのが加藤かけいで、紫水はかけいに師事するとともに『巖』に入会します。紫水は「初学の人とは思われぬ技巧の冴えた句を詠んでいた」（「持田紫水君のこと」『巖』昭和19年1月号）とされ、伊昔紅も「色彩に対する特異な感覚」（遺稿集『鷹』）に注目していたようです。

*

*

*

まつり来と秩父古町障子貼る

晩雪を刷きて武甲は花の上に

蠶^このにはほひ身につつきランプ吹き消しぬ

ひとこ糸の郭公^{かつこう}われにこのおもひ

炭下^{かけ}す崖みち篠に雪古りぬ

炭馬に垂氷^{たるひ}の巖が天そゝる

1-2 砲煙と椰子 (昭和15年~18年)

○ 出征 (昭和15年)

昭和15年3月、紫水は陸軍衛生兵として招集を受けます。俳誌に作品を投稿する際には所属を記しますが、『馬酔木』誌上での紫水の所属は下表のようにまとめられ、近衛歩兵第4連隊に所属していたと推察されます。

出征から招集解除となる昭和18年6月までの約3年間、紫水は現在の中国南部 (漢口・南寧) からインドシナ半島 (現ホーチミン市・バンコク)、マレー半島、スマトラ島、スラウェシ島 (メナド) へと転戦し、その間に太平洋戦争開戦直後のシンガポール攻略のような大規模な戦闘も経験したと考えられます。

表1 持田紫水の所属

時期				所属
昭和15年	9月			東京陸軍病院
昭和16年	3月	~	昭和16年 10月	南支派遣軍
昭和16年	11月	~	昭和17年 3月	仏印派遣
昭和17年	7月	~	昭和17年 10月	南方派遣
昭和17年	11月	~		スマトラ派遣

※ 『馬酔木』誌の「新樹集」、昭和15年9月号から昭和18年2月号までの25冊から抽出した。

※ 東京陸軍病院は東京第二陸軍病院大蔵臨時分院 (現東京都世田谷区) を指すと考えられる。

○ 作品の確立 (昭和16年)

紫水が赴任した南中国、インドシナ半島、東南アジア島しょ部は、俳句の根幹である季節感や動植物、地質、文化等の環境が日本列島とは異なります。『巖』昭和16年6月号に、紫水が現地から送った熱帯植物の写真や葉書を紹介する記事が掲載されています。リラ、鳳凰木、罌粟、木綿花(ムーエンファ)などの開花時期、花卉の形、色彩、利用方法などをレポートしたもので、緊張感の漂う戦場勤務の傍ら、紫水が俳句の題材を丹念に研究していたことが伺えます。かけいは紫水の作品について、南中国派遣以後に個性を表現するようになったと評していますが、その背景にはこのような真摯な姿勢があったといえるでしょう。また、紫水の赴任先には『巖』同人である竹島^{はくようし}白蓉子(昭和16年度馬酔木賞受賞、後に戦死)や浅羽緑子(後ラバウルへ転戦、俳句日記『ラバウル風景』を刊行)が着任しており、その作品も刺激と励みになったと考えられます。

*

*

*

塔かすみ湖をつゝめる花菜の黄
江蒼く桃のくれなる咲きうつり

『巖』
同

昭和16年6月号
同

芭蕉林さまざまに輝る月の海
相思樹の實がこぼるゝか夜の焚火
水草生ふ湖沼^{こしょう}を軍馬うちわたる
鳳凰樹^{わかぼ}嫩葉をたれぬ雷の下
椰子の月鈴鳴らしゆく馬車ありぬ

『馬酔木』
同
同
同
同

昭和16年3月号
昭和16年4月号
昭和16年5月号
昭和16年7月号
昭和16年11月号

※ 5作品はいずれも昭和16年度馬酔木賞予選掲載作品

○ 「聖戦俳句」と紫水

『馬酔木』誌に「聖戦俳句抄」という欄があります。出征した俳人が前線で詠んだ句を紹介するもので、昭和14年に設けられました。選句と講評は秋櫻子です。昭和15年12月号から昭和18年2月号まで、計9句の紫水の作品が残っています。

*

*

*

わが務大きくあふぐ夏の雲	『馬酔木』	昭和15年12月号
椰子遠く夜々の雷火の燃えにけり	同	昭和16年9月号
椰子を裂く砲火や蟬のしづけさに	同	昭和17年7月号
椰子高くわが弾裂くる夏の雲	同	昭和17年10月号
椰子の月かけ曳き飛べる弾あふぐ	同	同
いくさせし椰子の汀も朝焼けて	同	昭和17年11月号
この島に年暮れむとす椰子を葺き	同	昭和18年2月号

※ 昭和16年度馬酔木賞予選掲載作品を除く

○解説：戦争俳句の背景① 「日本文学報国会俳句部会」

昭和12年、盧溝橋事件に端を発した大陸での戦火拡大に伴い、戦争俳句が急増します。戦争俳句は前線で詠まれた「前線俳句」、内地で詠まれた「銃後俳句」、各種報道や戦争文学を媒介に、戦地を想像した「戦火想望俳句」に整理されます。

太平洋戦争開戦直前の昭和15年には「国民詩たる俳句によって新体制に協力する」との趣旨で日本俳句作家協会が結成されました。同協会は昭和17年、大政翼賛会の外郭団体である日本文学報国会に統合されて俳句部会となり、俳壇は文学を通じた国策宣伝をはじめとする戦争協力を余儀なくされていきました。

○ 解説：戦争俳句の背景② 「前線俳句と大陸風物俳句」

「前線俳句」について、俳壇ではどのように評価されていたのでしょうか。馬酔木系俳誌『暖流』を主宰した瀧春一氏は、昭和18年刊行された俳句入門書『俳句』中の「戦場の俳句」で、戦場や戦闘の様子を詠んだ作品を典型的な前線俳句とした上で、以下のように述べています。

戦場に生まれた俳句は、一般の俳句のように作者の個性が見られないようである。これは同じ境遇生活にあり、対象となるものが決まってしまうし、戦場にあるものの心理が単一化されるからであろう。

軍という組織に所属し、作戦行動の中にあって検閲も厳しかったであろう出征俳人が置かれた環境を考えると説得力があります。

一方、春一は戦争俳句には純粹に現地の自然を詠んだ作品もあるとして、紫水の作品を数多く取り上げています。次のような一文があります。

第一線ばかりでなく其後方にある平和的な生活情景に素材を採るようになればいくらかでも道は拓かれてくる。(中略) 私は「戦場便り」として将士達の読まれた大陸風物俳句をも豊富に見たい慾を持っている。

当局の要請もあり、典型的な前線俳句が特別な扱いを受ける中、この一文は、純文学としての俳句が持つ可能性に触れた貴重な証言といえます。

○ 馬酔木賞の受賞（昭和17年）

太平洋戦争開戦直前に東インドシナ半島に赴任していた紫水は、開戦後にマレー作戦を経て、スラウェシ島メナドに着任します。この頃から紫水は作品の題材に椰子を選ぶようになり、『馬酔木』『新樹集』の巻頭を飾るようになります。一連の作品は、戦場の兵士の姿を「椰子が砲煙にけふる中から散見できる記録的な佳作」として、あるいは椰子という題材を介して「『南方俳句』の開拓に先鞭をつけた」と評されました。「南方俳句」は太平洋戦争開戦後、紫水のように東南アジアへ出征した俳人から送られた作品を指します。「熱帯季題」の問題が再度クローズアップされたといつてよいでしょう。『巖』昭和18年10月号の「巖座談会」に、以下のようなやり取りがあります。

紀美男：小島昌勝さんの重厚な句に比し持田紫水さんの句は美しいですね。

玲々子：持田さんや竹島さんは季感に困られた由ですね。

かけい：南方季題論といふ問題が最近よくとりあげられているようであるが、この問題など竹島、持田、相澤氏によって実質的にあっさり片付けられてしまった。

紫水君がこの季題に就て何か述べたいと言っていたが、あゝいう人が書けば本ものだ。

黄磁朗：之は南方のみでなく全世界どこでも日本文学としての俳句が存在し得るといふ事になると思ふ。

昭和17年、紫水は第11回馬酔木賞を受賞します。紫水が所属する『巖』誌の同人・竹島白蓉子の受賞に続く快挙でした。

*

*

*

旗あげて涼しき椰子の日の出待つ	『馬酔木』	昭和17年	1月号
椰子の月渚の光かぎりなし	同	同	同
夕焼けて椰子いづる帆の遅速あり	同	昭和17年	2月号
月の出の雲の燃ゆるや花甘蔗	同	同	同
夕暁(ママ)の波をどり来ぬ孔雀椰子	同	昭和17年	3月号
椰子の葉を垂れて戦車も涼しさよ	同	昭和17年	10月号
星すゞし敵壘燃ゆる椰子の下	同	昭和17年	11月号

※ 昭和17年度馬酔木賞予選掲載作品(除「聖戦俳句抄」掲載作品)

○ 解説：戦争俳句の背景③ 「熱帯季題論」

戦前の日本では、植民地であった台湾や、大正期に移住が始まったブラジルでも俳人が活動していました。昭和10年前後の『ホトトギス』誌は、このような俳人の悩みとして、歳時記の季題と現地の風物が一致しない、現地の季節感覚が日本の四季と異なる点を挙げています。

昭和11年、渡仏を機に台湾やシンガポールを訪れた虚子は、問題解決のため熱帯特有の気象や植物を「熱帯季語」として歳時記の「夏の部」に組み込むことを提唱します。これは昭和15年の虚子編『新歳時記』で実現し、スコール、椰子、檳榔樹等が新たに夏の季語に加わりました。

この取り扱いに対しては、俳壇上で反対もありました。台湾在住の山本^{はらえ}孕江は「台湾独自の歳時記」を設けることを主張しましたが、虚子は「日本本土に興った俳句はどこまでも本土を基準として、本土に生まれた歳時記を基準」にすべきと譲らなかったといえます。

*

*

*

『俳句研究』昭和18年9月号に、台湾の王碧蕉氏が書いた「俳句の大東亜性」と題する一文があります。台湾は日本に比べて季節感を感じる機会が少なく、俳句を作ること季節への風雅な心を失わないでいるという俳人阿川に対し王は、それは日本の四季と比較した上での話であり、「純台湾生れの人なら、その様な事は言えない筈であらう。私には判然とした台湾の季感が感得される」(＝台湾には台湾独自の季節感がある)と述べています。

その上で王は、俳句を世界へ普及したいと考えるなら、日本とは環境が異なる場所に住む人々の「季の地方性」を肯定する必要があるとします。この「季の地方性」とは、季節感はもちろん、人々の間で歴史的、文化的に共有されてきた共通体験や感性も含んでいました。現代のHAIKUにつながる、短詩としての俳句が持つ可能性を感じ取っていたのかもしれませんが。

1-3 皇鈴山夕照 (昭和18年～25年)

○ 帰 還

昭和18年6月、紫水は病気のため招集解除となり、スラウェシ島から三澤村へ帰還します。昭和19年2月号の『巖』には旭昭水 (未詳。町内俳人か) により、伊昔紅宅で歓迎句会が催されたことや、帰還を機に秩父馬酔木会例会を再開する話が出たことがつづられています。しかしながら、病状は悪化の一途をたどり、紫水は昭和18年11月に急逝します。27歳の若さでした。

*

*

*

梅雨の雷紫蘇^{しそ}摘む母がつぶやける
けふこそとわれ歟とりぬ茄子咲ける
ひぐらしのこの外風呂も久しぶり
峡の町霧にぬれつゝ夏まつり

伊昔紅宅句会

『巖』誌編集 持田紫水句集『椰子』

同

同

○ 「鷹」

敗戦後の昭和25年10月、伊昔紅と実行委員の手により、紫水の句碑が^{みすずやま}皇鈴山山頂に建てられます。経緯や除幕式の様子は、俳誌『雁坂』昭和25年10月号に載せられています。また建立の記念として、雁坂発行所から主に『馬酔木』掲載作品をまとめた句集『鷹』が発刊されました。皇鈴山は戦前から若鮎や秩父馬酔木会の俳人が句会を催し、秩父音頭を踊った町の俳句ゆかりの場所であり、紫水の句碑が立つ場所としてふさわしいといえるでしょう。

*

*

*

いっしんに鷹見てありぬ萱は穂に

皇鈴山句碑

2-1 酒とメガネの青春 (昭和15年～昭和17年)

○ 兜太の来歴

昭和12年の旧制水戸高等学校入学後、兜太は皆野町を離れます。本格的に俳句に取り組むのは同校先輩である出沢珊太郎に出会ったことがきっかけとされ、学生俳句連盟機関紙『成層圏』に参加しています。卒業後、浪人生活を経て昭和16年、東京帝国大学に入学します。兜太は昭和14年から出沢とともに嶋田青峰主宰の『土上』に投句していましたが、同誌は京大俳句事件で廃刊となり、以後は加藤楸邨かとうしゅうそん主宰の『寒雷』に関わるようになります。

この時期、兜太は戦後に活動をとともにする沢木欣一さわききんいちや原子公平はらこうへい、堀徹ほりてつと出会っています。欣一は旧制金沢第四高等学校から東京帝国大学に進み、『馬酔木』や『鶴』に投句していた人物で、『寒雷』句会で兜太と出会いました。公平は欣一と中学の同級で、旧制京都第三高等学校から東京帝国大学に入学。欣一にすすめられて俳句に取り組み、『馬酔木』に作品を投句しています。堀徹とは、発刊が厳しくなっていた『成層圏』の東京句会で出会っています。俳句に関する演説を一席ぶちあげた兜太を、度の強いメガネの奥にある細い片目を見開きながら激しく批判した(『わが戦後俳句史』)エピソードは、後々まで兜太の心に残り続けたようです。

2-2 曼殊沙華と狸 (昭和17年～昭和18年)

○ 『寒雷』の作品:俳句

兜太が作品を投じた『寒雷』には、秩父の風土や皆野町を舞台にした俳句、エッセイ、短編などが掲載されています。秩父札所第34番水潜寺には

* * *

曼殊沙華どれも腹出し秩父の子 『寒雷』昭和17年12月号

* * *

の句碑がありますが、『寒雷』昭和17年12月号の「寒雷俳句の動向」に、楸邨による同句の講評が掲載されています。

都会に住む人が、たまたま訪れた田園風景を題材に、好奇の目をもって作った田園・自然俳句に対し、兜太の句は秩父の風土に根ざした作品であるとし、ます。「都会的な機智の巧さに流れぬ人間的地盤の上に立たなくては、俳句は存在できぬ」という一文は、この時期に芭蕉の研究へ進んだ楸邨の俳句観を示すとともに、戦後の兜太の原点をすでに伺うことができます。

○ 『寒雷』の作品：エッセイと短編

俳句以外の『寒雷』所収作品について、「狸の應召^{おうしょう}」（昭和17年9月号）と「おだいさん」（昭和18年6月号）があります。いずれも皆野町を舞台にした作品です。

「狸の應召」は金子家のシンボリックな存在であった鉄製の狸の置物が、戦況の悪化に伴う物資回収により、赤いチョークで襷^{たすき}を描かれて出征（＝回収される）するまでを描いたエッセイ風の短編です。一方の「おだいさん」は、頑固で変わり者のうどん屋の老婆が、大陸で戦死した親戚の村葬で虚脱状態となり、やがて亡くなるまでを描いた作品です。

田中亜美氏はこの2作品を「兜太の精神をもっともよく示している例」として詳細に分析しています。「狸の應召」は秩父の季節の移り変わりや秩父音頭の笛、太鼓、手拍子など、色彩や音の描写がふんだんに取り入れられた童話的な作品とされます。これに対し「おだいさん」は、主人公とそれを取り巻く人々の描写が中心で、「狸の應召」のような自然描写は見られないとします。また、村葬や、主人公が亡くなるといった重要な場面では、沈黙と死の象徴である「白」という色彩を基点にストーリーが動く指摘します。

「出征」や「戦死」など、戦時下の普遍的なテーマを扱いながら、作風が全く異なる2つの作品が、半年間で生まれた点を田中氏は重視しています。出征という現実が迫る中、戦場で命を落とす、あるいは他人の命を奪うという倫理的葛藤のあり方を、兜太は当事者として表現したという評価がなされています。

※ 田中亜美「霧の〈郷愁〉・雪の〈寂寥〉 —金子兜太における戦争と〈私〉性をめぐって—」, 『日本現代詩歌研究 第12号』, P123-144, 2016

○ 出 征

昭和18年9月、東京帝国大学を繰り上げ卒業となった兜太は海軍経理学校に入学します。原子公平の日記によれば、同月25日から26日にかけて、三峯山行とともに兜太の壮行会が秩父市大滝の二木旅館（現「ゲストハウス錦」）で開かれています。集まったのは伊昔紅・兜太父子の他、楸邨、本田功、牧ひでお、欣一、公平等の『寒雷』メンバーでした。生まれたままの姿で秩父音頭を踊る伊昔紅と兜太の姿を、楸邨は印象深く述懐しています。

昭和18年12月に発行された句集『伐折羅』^{ぼさら}には、東京寒雷俳句会叢書^{そうしょ}第一集の記載があります。序（跋とある）に「この日大詔戴きてここに二年／この月『寒雷』世に出でて三年／この年芭蕉逝きて二百五十年」の後に、「この集おのづから凝りて一冊となりぬ」と結ばれているとおり、『寒雷』創刊3周年を記念して編まれた句集であったようです。

*

*

*

底光る夏の曇天煙突ども

あぐら居の股ぐらに射す西日かな

なめくじり寂光を負ひ雛のそば

戦勝報雪光あまねきわが部屋へ (シンガポール陥落)

海の噺^{とん}に花粉のごとき時雨かな (伊豆熱川)

山脈の一隅赤し蠶のねむり (秩父に住みて)

蔵の間にかりがね仰ぐ里帰り (妹嫁ぐ)

冬月の簷陰^{えんいん}ふかき別れかな (安東次男征く)

※ 句集『伐折羅』所収作品

2-3 要塞と夜盗虫 (昭和19年～20年)

昭和19年3月、兜太はトラック諸島の夏島に、第4艦隊施設部付の主計科士官として赴任します。施設部は軍事、一般施設の土木建築計画の策定や実務にあたるもので、主計科は会計や糧食、衣服等の調達や管理を担当しました。

赴任時のトラック諸島は、アメリカ軍による大空襲（「ヘイルストーン作戦」・「海軍T事件」）を受けた直後で、撃沈された艦船や航空機の残骸が海や陸に無残な姿をさらしていたといいます。泊地としての機能を失ったトラック諸島で兜太は風紀を取り締まる甲板士官にも任命され、増援として派遣された陸軍部隊とともに、全島の要塞化に取り組みます。

○ 解説：戦争俳句の背景④ 「トラック諸島」

トラック諸島は現在のミクロネシア連邦に所属する島々で、第一次世界大戦後に日本の委任統治領となりました。南洋群島（もしくは内南洋）と称された同領はパラオ本庁とサイパン、ヤルート等の支庁から構成され、サンゴ採集やサトウキビ生産などが主要産業でした。

大小250の島々を中心に、広大な環礁に囲まれたトラック諸島は太平洋戦争開戦後、艦隊泊地として機能します。四季になぞらえた春・夏・秋・冬各島と、日から月までの七曜島を中心に、夏島には内南洋の警備にあたる第4艦隊司令部が、春島、夏島、竹島、楓島には飛行場や水上機基地が建設されていました。

○ 句集『芽たばこ』

トラック諸島では、兜太の上司であった矢野兼武主計中佐（詩人西口皎三。後サイパン島で戦死）の発案で俳句会が催されていました。この句会は当初、艦隊司令部内で催されましたが、やがて陸軍でも開かれるようになります。夏島防衛の任にあたった陸軍第52師団歩兵第69連隊所属の木水育男氏は『トラック島戦記』中の「金子大尉との出会い」で、兜太から句会に誘われたことや、昭和19年当時の句会や施設部の様子を記しています。

食事の後俳句会に移るのだが、彼らは慣れたもので雑談を交わしているながら作句するのに、ぼくはなかなかでなかった。（中略）

俳句会にぼくが参加していることが連隊長の耳に入ったらしい。連隊長は、金子氏を招き、その指導を受け、連隊長主催の俳句会を開くようになった。句会では、参加者に菓子とタバコ二本が渡され、敗戦・引き揚げまで続いた。

歩兵第69連隊主催の句会は、昭和20年3月に句集『芽たばこ』としてまとめられました。その中に、客人作句として兜太の作品があります。

* * *

バナナの房熟れゆき煙草なき幾日 海軍 金子中尉

* * *

同書では、俳句会前の夕食としてカレーライスが振舞われたこと、夜に映画会が催されたこと、また虚子、秋櫻子、草田男、風生、誓子の書籍が、施設部内の図書館にあったことも記されています。

○ 帰 還

『わが戦後俳句史』によれば、昭和20年8月15日、兜太は秋島で敗戦を迎えたといえます。敗戦直後に作った句として以下の3句が挙げられています。

* * *

椰子の丘朝焼しるき日々なりき
スコールの雲かの星を隠せしまま
海に青雲生き死に言わず生きんとのみ

* * *

アメリカ軍の捕虜となった兜太は春島の飛行場設営に携わった後、昭和21年11月に本土へ帰還します。トラック島で作られた句も支給された石鹼箱に詰め込まれて持ち帰られ、句集『^{あがた}鼎』中の「生長」に掲載されました。

○ 解説：戦争俳句の背景⑤ 「飢えの島」

昭和19年7月から10月のサイパン、グアム、テニアン、ペリリュー・アンガウル（パラオ諸島）各島の陥落後、トラック諸島は補給を絶たれ孤立します。当時の食糧配給状況は、同年7月で通常の60%、12月で30～40%程度といわれ、栄養失調症が蔓延していました。残っていた食料は決戦用糧秣^{りょうまつ}として倉庫に封印し、全島で甘蔗^{かんしょ}やキャッサバ、野菜が作られています。昭和20年前半には夜盗虫という蛾が大量発生し、作物を食い荒らす事態が生じました。

昭和19年当初、トラック諸島には約46,500名の日本兵が駐屯していましたが、終戦当時の記録では約38,500名であったとされます。約8,000名の死者のうち、海没は約2,000名、陸上の死者は6,000名で、その多くが戦病死（主に栄養失調症）でした。

3-1 塩谷孝のプロフィール

塩谷孝 (俳号：^{うしおやこう}潮夜荒) は『若鮎』創刊以来、伊昔紅のもとで俳句を学んだ俳人で、太平洋戦争開戦直前には黒澤宗三郎、城一佛子とともに篠田悌二郎主宰の『初鴨』同人として活躍していました。『初鴨』昭和16年3月号では、作品の合評欄である「青炎集」に宮前百鈴、一佛子とともに出ています。雑詠集である「初鴨集」の巻頭を飾った昭和14年8月号の作品を紹介しましょう。

*

*

*

蠶飼せはし身なりかまはぬ妻とねる
蠶いきれにねこけみだらな妻とねる
汗に寝てかたへの妻も蠶のほひ
蠶を飼ひて人の子吾子をかへりみず

『初鴨』

昭和14年8月号

同

同

同

同

同

同

*

*

*

同号の選後評では、「斯くもあろうかと思われる農民の姿がまざまざと描かれている事が魅力かもしれない。事実之らの句は、むれた桑のほひがぷんぷんするではないか」と悌二郎に評されています。

3-2 ト号作戦 (昭和19年)

○ 出征

昭和18年11月、孝は臨時招集を受け、中国大陸の漢口^{かんこう}へ向かいます。独立野戦重砲兵第15連隊要員としての出征でした。独立野戦重砲兵部隊とは、カノン（加農）砲などの重砲と、それをけん引する車両から成る部隊で、独立した機動性を与えられていました。

孝は出征直後から日記形式で移動経路や作戦中の戦闘記録、現地で詠んだ作品などを手帳に書き留めており、後に『陣中日記』として刊行されました。同日記から、孝の招集が、当時中国大陸で展開されていた「大陸打通作戦」のためのものであったことが分かります。

○ 解説：戦争俳句の背景⑥ 「大陸打通作戦」

「大陸打通作戦」は、台湾への空襲や、東南アジアと日本列島を結ぶ輸送路の攻撃拠点となっていた中国内陸部の航空基地占領を目的とした作戦です。大きく京漢^{けいかん}作戦と湘桂^{しょうけい}作戦に分かれ、孝は後者に参加しました。主要な作戦対象は、大規模な飛行場を有する湖南省^{しょうよう}の衝陽^{けいりん}と桂林です。

湘桂作戦は制空権が劣勢であった上に作戦区域が広大で、当初から補給が困難になることが予想されていました。事実、食糧確保は「現地調達」が前提とされ、長距離行軍を強いられた各部隊では栄養失調やマラリアが蔓延します。武器や弾薬の補給も滞ることが多く、小銃や弾薬を持たない兵員のみが補充されることもたびたびありました。

○ 警備と軍事訓練

『陣中日記』によれば、孝は昭和18年12月の漢口（現在の武漢）到着後に当陽（武漢の西。現在の湖北省宜昌^{ぎしやう}）へ移動し、翌年5月まで同地区の警備任務と軍事訓練に従事します。この間、連隊本部付を経て自動車班所属となりました。この頃の日記は、内地にいる家族へ語りかけるような文体が多くみられます。手紙の下書きも兼ねていたのかもしれませんが。

原隊に着く途中一割位の損失ある見込みとのことですが、父ちゃん（孝を指す）は自信があるから敵の弾丸なんかには絶対当りません。心配しないで手柄話を楽しみにして下さい。「昭和18年12月7日」

夜は八時の点呼まで演芸会でした。父ちゃん達は秩父音頭をやりました。
もののふの覚悟や菊に霜きびし「昭和18年12月8日」

警戒兵の勤務。夜不寝番と衛兵を兼ねたようなもの。
霜柱ふみは、かりぬ警戒兵「昭和19年1月9日」

自動車班への配属が決まった昭和19年4月以降、優しい口語調は日記から消えていきます。4月30日の日記に「五月十五日に沙洋鎮^{さやうちん}に集結、江東方面の作戦に参加するらしい」と言われている。」と記されたとおり、孝は湘桂作戦（ト号作戦：5月23日日記にも記載有）参加のため、5月初めに当陽を出発します。沙洋鎮（現湖北省）、長沙^{ちやうさ}（現湖南省）を経て衡陽と桂林攻略に至る、約1600kmの長距離行軍の始まりでした。

○ ト号作戦

「大陸打通作戦」の後半部である湘桂作戦は、制空権が不利な状況下での行軍となり、弾薬、食糧、資材などの補給も不十分でした。

山又山の難行路。炎天の下を黄色い土埃をあげて自動車も兵も馬も黙々と長沙へ長沙へと進軍する。

兵睡る砲車を日陰として睡る

「昭和19年7月12日」

7月21日、未処理の地雷や爆撃機の空襲、戦闘機の機銃掃射の中を長沙へ到着した孝は、休む間もなく衝陽へ後方部隊として出発します。8月8日には衝陽の数km手前で陥落の一報を受けています。

全車両無事渡河完了。敵機の活動物すごく、湯も沸かせない。藪の中に寝るが暑くて睡眠もできない。

「昭和19年8月1日」

夕方驟雨、四料位先の山中に行くことになる。(中略)山の向こうが明るくなる程友軍の砲撃が激しい。

砲撃のはげしきひまの虫しぐれ

「昭和19年8月6日」

9月上旬、衝陽から桂林へ出発、11月17日に作戦は完了しました。

桂林まで十二料の処まで前進、これから先に出ると砲撃されると言う。頭の上ですれすれにP51二機、あわててかぶった藁たばが風にさらさらする。

「昭和19年11月2日」

戦跡見学の随行。

敵の地図焦げて散らばる秋風裡

「昭和19年11月14日」

3-3 手帳の行方(昭和20年)

桂林警備と、柳州^{りゅうしゅう}(現広西チワン族自治区)派遣を経た昭和20年2月、孝の部隊に移動命令が出ます。戦況の悪化を踏まえ、上海方面への大規模な兵力転用が決定されたためでした。

往路とは逆に桂林から衝陽、長沙を経て、沖縄へのアメリカ軍上陸が始まっていた4月19日に漢口へ到着した孝は、受け取った手紙から幼少のわが子の死を知ります。

ゆく雁やわが懐に子の訃報

「昭和20年4月19日」

たえがたきひとりの想い四月^{つく}盡

「昭和20年4月29日」

6月、孝は内地転属になった知り合いに手帳を届けてほしいと依頼します。手帳に挟まれた子どもたちの写真の裏には、小遣いとして10円札2枚が貼りつけられていました。作戦記録が詳細に記された手帳が検閲を受ければ厳罰は必至でしたが、手帳は奇跡的に皆野町へ届くのです。

汗しみし手摺れ日記ぞ妻に届け

「昭和20年6月20日」